

『KOTONOHA』発刊5周年に寄せて

中村雅之

1. 創刊当時のこと

本誌『KOTONOHA』の創刊のことについて、主宰者でもなく編集にもたずさわっていない私が記すのは、本来お門違いというか、越権行為でさえあるのだが、誌名の決定に際して、私自身も些かの関わりを有しているので、あえてここに駄文を弄することにする。

2002年の10月に金沢で中国語学会が開かれた。それに参加するために現在『KOTONOHA』を主宰する吉池孝一氏も金沢に来ていた。私はその頃、金沢で私塾を開いたばかりで、多くの段ボールと本棚の組み立てに悪戦苦闘していたが、そのような状態の塾に吉池氏が遊びに来た。乱雑な室内に腰掛けながら、塾の名前は何かと問うたので、「ことのは塾」だと答えると、吉池氏はしばし瞑想にふけり、いい名だ、その名を拝借できまいか、と言い出した。聞くと、近々愛知県立大学の研究室で学生たちと一緒に雑文集のような研究小冊子を出す予定だという。今のところ、その雑誌の名として学生から「TERAKOYA」という案が出ているが、「KOTONOHA」の方がずっといい、ということだった。私の方は何の異存もないので、自由に使ってくれと返事をし、雑誌の名はめでたく現行の「KOTONOHA」に決定した。

翌月、すなわち2002年11月に『KOTONOHA』第1号は無事発行された。驚くべきことに、それからほぼ月に一度のペースで発行され続け(2003年8月のみ休刊)、丸5年を迎えた今、60号を出すに至った。この雑誌の計画を金沢で聞いた時には予想すらしなかった快事である。

2. 発刊以後の展開

初めの数回は学生の文章が中心であった。短い文章とはいえ、自分の論を発表する機会を得ることによって、自らの知的土壌を豊かにする効果があり、それがこの小冊子の目的の一つでもあった。しかし、文章を書くことに慣れていない学生たちが連続して毎月執筆するというのは無理な話で、投稿は徐々に少なくなっていく。私は直前に偶然発刊の話聞いたというだけの縁で毎回執筆するはめになっていたが、第5号にはついに執筆者は吉池氏と私の二人だけに

なった。

このままでは刊行続行も危うい状態であったが、幸いなことに、2003年4月に竹越孝氏が鹿児島大学から愛知県立大学に転任してきた。同年7月の第9号からは竹越氏も毎月寄稿することになり、少なくとも毎月3人の執筆者は確保されることになった。その後は学生や学外の研究者からの寄稿も時折あり、何とか体裁は保たれている。

さらに2003年11月には「古代文字資料館」が開設され、『KOTONOHA』は形の上では同人誌から同館の機関誌という位置づけになった。そして2004年7月、インターネット上にウェブサイト「古代文字資料館」が開設されると、小さな冊子に過ぎなかった『KOTONOHA』は新たな局面を迎えた。

3. PDF化

ウェブサイト「古代文字資料館」は、文字資料の展示と解説を主たる目的として始まったが、もう一つの柱として、『KOTONOHA』をPDF形式で公開することを決め、毎月のサイト更新の際に前号がアップされることになった。

それまでは関心のありそうな研究者に郵送するだけであった小冊子は、ネット上に公開したことで、読者が格段に増え、注目度も増してきた。執筆する側にとっても、一度印刷した文章に誤記が見つかった場合、PDFでの公開に際して訂正できるという利点がある。また、過去に自分の書いた文章を探すのにも、印刷版を見るよりは、「古代文字資料館」のサイトで探す方が速いし便利である。

4. 月刊ということ

さほど長くない文章とはいえ、毎月書き続けるのは容易なことではない。それでも『KOTONOHA』は月刊というスタイルを守り続けている。なぜ月刊なのかを主宰者に問うたことはない。おそらくは次のようなことなのではないか。

学会誌や紀要の論文は年に一度か二度、満を持して書く文章であって、いわば完成品である。しかし『KOTONOHA』は必ずしも完成品を求めない。未完でもよいし、思考の切れ端でも構わない。浮かんで消えるようなあらゆる発想、やりかけの作業、整理途中の資料など、本来まじめな研究誌には取り上げてもらえないような代物をこそ歓迎するのである。一度書いたものを、後の号で追加したり、修正したりということも多々ある。つまり、最終結果だけでなく、思考過程の吐露をこそ歓迎する雑誌といえる。このような目的には月刊というスタイ

ルが最もふさわしいのではあるまいか。私自身は「没mei」について都合4回書いています。将棋でいえば、何度も「待った！」をかけて、やりなおしたことになる。こんなことが堂々できる雑誌は外にはまずなからう。

このような性格の雑誌であるから、玉石混淆というか時に石ころだらけということもあるかも知れないが、読者にはその「石」をも楽しんで頂ければ幸いである。再度登場する時には、少し磨かれているはずであるから。